

災害から学ぶこれからの私

佐用町立佐用中学校一年 長谷川仁迦

「PTSD（心的外傷後ストレス障害）」。

一見、今の私とは縁が無いように思えますが、当時四歳の私はこの「PTSD」かもしれない、と言われていました。

二〇〇九年八月九日。台風九号により、私達の生活は一変しました。積み上げられたごみの山。道路を埋めつくす泥。戦車のような自衛隊の車。浸水して物が散乱した家の光景を、私は今でも覚えています。私はこの日、被災者になったのです。

今はすっかり日常を取りもどし、安定した生活が送れています。いくら町や家が復旧したからといって、すぐに人の心の傷まで癒える訳ではありません。生活が元にもどりだしたころ、私の様子がおかしい、と周りが気づきはじめました。父の消防団の帽子を必死に隠したり、ごみの山を見ると、極端におびえたり、買い物先で防災無線が聞こえると、取り乱して泣き叫んだりしていたそうです。そして、私は、「PTSD」の疑いがある、と言われました。心配した母は、「家の近くの保健センターに専門の先生が定期的に来るみたいだから、行ってみたら？」と知人にすすめられ、何度か通ってくれました。

私はその時の事はほとんど覚えていませんが、先生と一緒にいた保健師さんたちは、私のお話をたくさん聞いて下さいました。家の車が全てなくなり、保育園まで母と手をつないで毎日通っていたこと。保育園の帰りに、友達のお母さんが車で家まで送ってくれたこと。父の会社の方がたくさん来てくれて、家の中の片付けと一緒に手伝ってくれたこと。私の話のほとんどが「助けてもらって嬉しかったよ」といった内容であることに、先生は母に「この子は自分で立ち直れますよ、安心して下さい。」と言って下さったそうです。その後徐々に、防災無線におびえたり、父の消防団の帽子をかくすことはなくなってきました。

二〇一一年三月十一日、東日本大震災が起こりました。この地震は観測史上最大の地震と言われていました。

つい先日、テレビで「避難先でのいじめ」についてのニュースを見ました。私はそれを見て、強い不快感を持ちました。被災者の方が、「放射能がうつる」と言われたそうです。不安を抱えて避難してきた被災者の方に、そんな言葉は許せないと思います。思いやりのないその言葉は、被災者の方を深く傷つけ、絶望的な気持ちにさせてしまうのではないのでしょうか。避難してきた方々が、どんな経験をし、どんな思いでそこに避難してきたのか、考え、知ろうとするべきだと思います。

そして、この様な話を聞いたのは一度だけではありません。福島産の農産物が売れない、レストランの入店を断られるといった、差別的なニュースを耳にしたことがあります。災害という出来事は、差別や偏見、いじめを生んでしまうのでしょうか。

いや、私はそうは思いません。

私が今、こうやって昔の自分と向き合いながら、この作文を書けているのは、家族や沢山の方々の支えがあったからだと思います。

もし、私が偏見や差別、いじめを受けていたのならば、もし、未だPTSDに悩まされていたならば、今こうやって、みんなと机を並べて勉強したり、友達と何気ない話で笑い合ったり、この作文も書けなかったと思います。私達は、みんな人に支えてもらいながら生きていくのです。

今年六月には大阪府北部地震、翌月には西日本豪雨が相次いで起き、多くの被災者が出ました。これからも、予測しない様々な災害が起こるでしょう。しかし、差別や偏見、いじめなど、つらい思いをする人が増えてほしくないと思います。

そのために、自分ができる事は何なのか・・・今はまだ、テレビや新聞で見たり聞いたりした情報の中で考える事しかできず、無力さを痛感しています。でも、私達は、被災経験者として、当たり前だと思っていた生活がどれだけ大事なのか、どれだけ人に支えられて生きていくのかを知っています。だから、私の経験を通して学んだ事をこれからも大切に、伝えていきたいと思います。

そして、人と人が助け合い、思いやる心でいっぱいの中を指し、その社会の一員として私も頑張っていこうと決心しました。

最後に、当時私を気にかけて、支えて下さったみなさん、本当にありがとうございました。次は、私が人を支えてあげられる様な強い人間になろうと思います。